

## 敬語にひがし

五月（二〇〇六年）に三週間ほどパリで過ごした。大統領選挙の直後で、暴動はだいじょうぶ？ と日本からメールが来たが、街の表情はいたって穏やかだった。

とはいえ一九七〇年に初めて行った時と比べると、着飾った女性は少なくなっただし、贅沢な雰囲気もなくなった。フランス語も昔よりずいぶん味気なくなった気がする。

その代わり、白人でない人々の元気がいい。おしゃれした黒人女性の美しさは圧倒的だ。こと人種差別を無くすという点では、この三十年で幾らかの進歩があったのは確かである。

日本に帰ってきたら、大相撲の千秋楽だった。これこそ日本的な景物そのものと言いたいところだが、新しい横綱もまた外国人。国技はいまや国際技である。これも決して悪いことではない。

その白鳳がインタビューで自分に「お子さんもできて…」と言っていたのが何とも愛らしかった。周囲の人が「お子さん、お子さん」と言うので、聞き覚えたのだろう。私も外国人をやっている時は、身近なフランス人の話し方を聞いては表現を増やしていったから、よく分かる。

そういえば、日本の古語では天皇は自身に敬語を使う。それが正しい文法なのだが、これもお側の人々が使う敬語をそのまま做ったのがそもそもではないだろうか。もって身分の低い者だったら、誰かが「自分のことに敬語を使っ

## 敬語に「ひがし」

てはいけない」と教えただろうが、天皇にはそういう人がいなかった。それで天皇の自分敬語が定着したと思うのだがどうだろう。

言葉というのはまずは実践、つまり相手と自分とのやり取りから学ぶものだが、両者の立場が違うこともあって、時に奇妙なことになる。それも学ぶ方だけの問題ではない。例の白鳳の「お子さん」発言の直後、聞き手のアナウンサーが過去のことを「どう思い返しますか」と訊ねていた。ふつう相手のことではこんな言い方はしないものだが、外国人に分かり易くという心遣いが言わせたのだろう。国際化は単に他国の言語を学ぶという一面的な現象ではない。学ばれる側の国語をも変えてしまうものなのだ。

フランスのテレビ討論でも「あなた、君」について議論されていて、似たようなことを考えた。

フランス語では相手を尊重する場合は複数扱ひするのが決まりである。昔は身分の上下で区別したので、一九世紀のバルザックの小説など貴族の夫が妻を「あなた」と複数形で呼び、下男を「君」と単数で呼んでいる。二〇世紀には親しさの度合いが線引きになったから、いま読むと、まるで下男と親密な関係みたいで妙な気がする。

一九六八年の五月革命の顕著な成果は、教師と学生の間でお互いを「君」と呼ぶようになったことだが、先日フランスで見たテレビ討論はその反省で、「あなた」という言

# 敬語にきびがし

い方を復権させようという主張への賛否両論だった。

反対意見は「学校は教える者と教えられる者の立場の違いがあるから、先生を「あなた」と呼ぶのはいいけど、社会全体に広げて人との距離を大きくするのは反対。」

私自身は国際化には賛成だし、人をやたら区別するのは時代への逆行だと思っている。しかし国語にはまた別の論拠があることも事実だ。

初出|| 北國新聞「北風抄」二〇〇六年六月一二日

ホームページ掲載|| 二〇二三年四月二三日